

## 終章 21世紀の最先端医療へ

### 1. 建替え工事計画を推進

#### 総合健診センター、三井陽光苑をオープン

時代は昭和から平成へと移り、三井記念病院はさらに医療・事務体制を充実させていく。平成5年(1993)、敷地内に地上3階の管理棟を新築し、経理・総務などの事務機能を集約した。翌平成6年(1994)には隣接する住友商事神田和泉町ビルの2階、3階に入居した。2階はX線室やCT室、超音波室など最新の機器を配置した総合健診センター、3階は図書室や院長室、各部長室とした。その後、平成18年(2006)12月に管理棟を解体し、事務部門は同ビル4階に移した。

また、社会福祉法人である三井記念病院は高齢者福祉にも力を注いでいる。東京都福祉局の公募により、高齢者専門病院、老人保健施設とともに高齢者福祉・医療の先駆的モデルを構成する施設の一つとして、平成14年(2002)5月、東京都江東区に地上4階、地下1階の特別養護老人ホーム「三井陽光苑」を開業させた。

三井陽光苑は最先端の特別養護老人ホーム施設で、個室150床(一般高齢者100床、認知症高齢者50床)、ショートステイ30床の全180床からなり、三井記念病院の医療支援の下、常勤医師が在籍するなど万全の対応が整っている。



総合健診センター・2階ロビー



三井陽光苑

## 建替え工事計画を発表

三井記念病院の対外的評価が高まる中、平成16年(2004)10月には世界三大格付け機関の一つであるフィッチ・レーティングスから有担保債務格付けで「A格」が付与された。「A格」は債務の信用リスクが小さいと予想され、債務履行の確実性が高いことを意味する。格付けは平均在院日数や他の医療機関からの紹介率など18項目の基準と財務諸表の評価により認定された。「A格」は事実上の国内トップクラスの病院として認められたことであり、世界的格付け機関による病院格付けでは日本第1号となった。

当時、設備の老朽化、また、電子カルテや高度医療機器などへの対応を図るため、全面的な建替えを計画していた三井記念病院にとって、フィッチ・レーティングスによる「A格」認定は、追い風となった。そして、三井記念病院は平成18年(2006)10月3日が設立100年に当たるのを機に同年3月、「100周年記念事業」として総事業費約200億円の全面建替え工事計画を発表し、資金は三井記念病院の自己調達及び二木会にもくかいをはじめとする三井グループ各社で分担拠出した。

## 三井記念病院建替え工事出資27社(平成18年4月1日現在、社名は当時のもの)

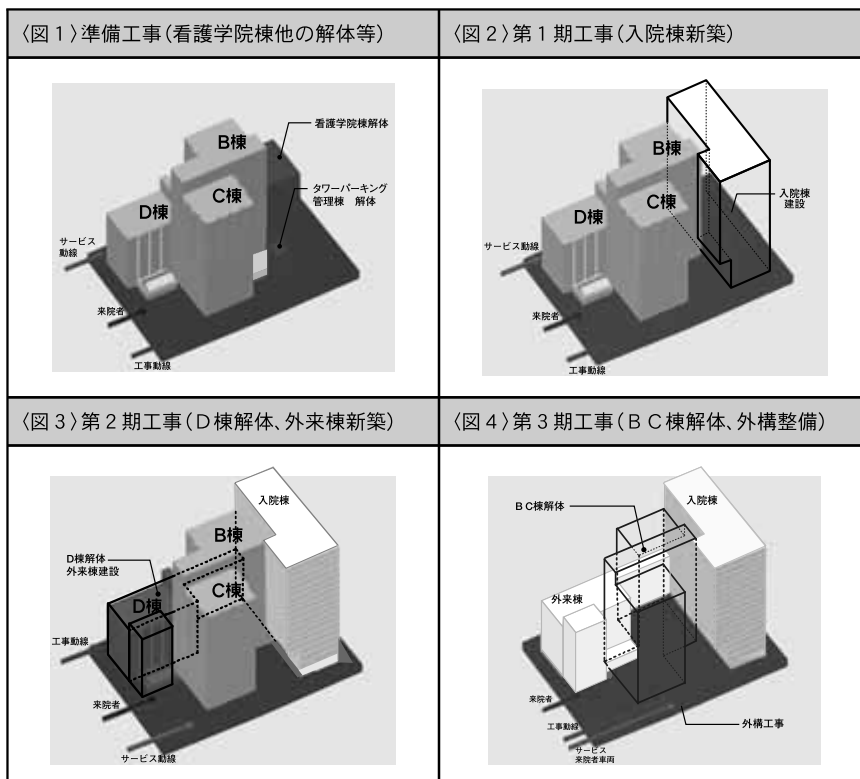
|          |            |                 |
|----------|------------|-----------------|
| 石川島播磨重工業 | 日本製鋼所      | 三井生命保険          |
| 王子製紙     | 日本製紙       | 三井倉庫            |
| 三機工業     | 日本製粉       | 三井造船            |
| 商船三井     | 三井化学       | 三井トラスト・ホールディングス |
| 太平洋セメント  | 三井金属鉱業     | 三井農林            |
| 電気化学工業   | 三井住友海上火災保険 | 三井不動産           |
| 東芝       | 三井住友建設     | 三井物産            |
| トヨタ自動車   | 三井住友銀行     | 三井三池製作所         |
| 東レ       | 三井精機工業     | 三越              |

(社名50音順)

## 2. 医療活動を続けながらの建替え

### 総事業費200億円の大計画

総事業費200億円の大規模な建替え工事は、工事期間5年、入院・外来の医療活動を続けたまま既存の看護学院棟、管理棟、D棟、BC棟を順次解体し、新たに入院棟・外来棟を建設するという大規模なものである。計画では、機能を混在したB、C、D棟の3棟構成から入院機能と中央診療機能を集約した「入院棟」と外来機能に特化した「外来棟」の2棟構成へと変更することとした。まず、看護学院棟及び管理棟、タワーパーキングを解体し、跡地に地上19階からなる入院棟を建設する。そしてBCD棟から入院患者を入院棟へ移転させ、その後、D棟を解体して跡地に入院棟と接続した地上7階の外来棟を建設し、最後にBC棟を解体する。これは病院建替え工事としては他に類を見ない大計画である。



三井記念病院建替え工事計画概要

る。

看護学院棟の解体により、三井記念病院高等看護学院は平成16年(2004)3月をもって閉院した。同年4月から共立女子短期大学に看護学科が開講され、33年間にわたる看護教育のノウハウが引き継がれた。また、管理棟の事務所は隣接する住友商事神田和泉町ビルの一部に移転した。解体工事は平成18年(2006)7月から3カ月間にわたり行われ、10月19日の起工式には田中順一郎理事長(三井不動産会長)や三井<sup>ひさしげ</sup>長生評議員会長(三井家同族会代表)、萬年徹院長など関係者110名が出席した。施工は鹿島建設



起工式で鍍入れする  
田中理事長

・三井住友建設共同企業体、設計・監理は日本設計、総合企画は三井不動産が担当した。

現行敷地内での都心病院建替え工事としては類を見ない規模であったが、千代田区が三井記念病院に隣接する和泉公園の使用を許可するなどの協力もあり、工事は順調に進められていった。

### 地上19階の入院棟完成

平成20年(2008)9月9日、起工から約2年の歳月を経て、建替え工事の要である地上19階・地下2階の「入院棟」が竣工を迎えた。病床数は482床、手術室は13室、延床面積は約2万8,900㎡。

同日、挙行された竣工式には、三井記念病院関係者や二木会・月曜会の三井グループ首脳陣が多数出席した。代表挨拶で萬年院長は、「100周年に当たり、21世紀にふさわしい病院建設へと踏み切りました。9月9日、重陽の節句というめでたい日に竣工を迎えたことは感無量で、職員一同にとっても大きな励みになります。本来の病院の姿となるまで、あと3年かかりますが、一丸となって皆さまのご期



竣工式で挨拶する萬年院長

待に添えるよう邁進して参ります」と喜びの言葉を述べた。

入院棟は低層部に中央診療機能、高層部に入院機能が集約された。高度医療、療養環境整備、運用体制の効率化、建物の安全性確保など様々な最新技術が採用されている。

高度医療では外科治療とカテーテル治療が同時に行える血管造影装置付ハイブリッド手術室や、最短0.35秒で1回転する最新鋭の320列C T撮影装置が導入された。手術室を11室から13室、I C U(集中治療室)を5床から7床、C I C U(冠疾患集中治療室)を3床から6床に増床したほか、H C U(高度治療室)も21床新設した。

各科病棟は9階から19階を使用。基準階を42床とし、療養環境の整備では、従来の6・8床室中心の病床構成から4床室の構成へ変更された。ベッド間の距離を離すことで、感染症の予防が図られ、また、看護師の作業場所も広く確保されることとなった。個室は67室から143室となり、個室率は約3割となった。最上階の23

室は全室個室、そのうち2室は特別個室となっている。便器は蓄尿する必要のない自動尿量測定便器を一部導入した。病室の天井は国内初めてのグリッドシステム天井を採用。照明やカーテンレールの移動を容易にするなど、フレキシビリティを重視してい



血管造影装置付ハイブリッド手術室



320列C T撮影装置



黒と白のモノトーンを基調とした入院棟  
1階ロビー

る。

また、搬送設備システムや電子カルテシステム等のIT導入により、効率化が促進された。搬送設備システムは薬剤部や中央材料室などから階を隔てた院内各所に薬や診療材料などを自動的に搬送する。

外観は都心施設との調和を図り、オフィスビルやホテルをイメージしたものである。バルコニーを設けず、低層階は黒と白のモノトーンを基調とし、病棟階は落ち着いた雰囲気とするなど、従来の病院とは一線を画すデザインとなった。1階には病院関係者に限らず利用できるコンビニエンスストアやレストランが設置された。工事が全て完了すれば、和泉公園のある南側から北側道路への通り抜けも可能となる。建物は制震構造を採用し、耐震性能を強化するとともに、大規模災害時の医療活動用に1階レストランには医療ガス設備を設置した。



平成20年9月に竣工した入院棟

## 次の100年に向けた高度医療

BC棟から入院棟への入院患者搬送は平成20年(2008)12月27日に行われ、最新病棟での診療が始まった。だが、建替え工事はまだ折り返したに過ぎない。D棟解体及び外来棟建設は平成21年(2009)1月から平成22年(2010)9月までの21カ月を予定しており、その後は11カ月かけ、BC棟解体と外構工事に移る。平成23年(2011)9月に全ての工事を終え、21世紀の医療にふさわしい病院が誕生する。

平成21年(2009)3月21日に開院100周年を迎える三井記念病院。三井八郎右衛門たか(高棟)みねが目指した医療福祉の精神は、関東大震災や空襲など幾多の苦難を乗り越え、三井グループに支えられながら次の100年へ脈々と受け継がれていく。

# 寄稿

## 戦後の三井厚生病院

(昭和45年まで)

三井記念病院元副院長 清瀬 闊<sup>ひろし</sup>

日本が初めて経験した敗戦のつけは、東京をはじめ殆どの全都市が灰燼に帰して決着したが、ここまで戦ったのかという虚脱感のみが残っていた。高い塀で震災は逃れても、空からでは三井厚生病院も例外ではなく、昭和20年(1945)3月10日の空襲で灰燼に帰したのであった。

GHQにより財閥が解体される寸前、三井財閥から3,000万円という、今で言えば300億円の金をくれるという連絡があったが、栗山重信院長の都合で1日遅れたため、GHQにより差し押さえられてしまった。当時の佐々木四郎理事(三井不動産社長)、林春夫理事(東京帝国大学医学部教授)、栗山院長らは口を揃えて「もう再開は無理である」と言っていた。

岩田正道産婦人科部長、白石謙作内科部長らは戦後の無気力時代を経て翌年、病院を是非残したいとの願望が強くなってきた。新任の荷見理事(元三井不動産)は東京帝国大学・田宮猛雄医学部長に後任院長派遣を強く要請したが、「院長を出すことは無理であり、岩田部長を院長にすることではどうだ」との返事を得た。ちょうど栗山院長は昭和21年(1946)、定年退職された。

同年春には仮診療所を開設。診療のための器具は看護婦が決死の思いで搬出して自宅に保管してあったものと、東京帝国大学医学部附属病院から貸し出しを受けたものであった。諸物資の欠乏・高騰が続く中、細々ではあったが、医療従事者の気概によって診療が開始された。

最初に復員してきた山門幸雄、中野祐雄ら医局員に続き看護婦も復帰し始め、漸次増えて総職員は30名くらいになっていた。昭和22年(1947)3月に病院の再建に見通しが出来たので、一旦全員を解雇し、改めて残ることを希望した人達を再雇用し、戦後の三

井厚生病院の時代に入った。

診療室は老若男女を仕切りのない一室で、机の両端で2人の医師が診るものであり、特に内科では上半身を裸にさせていたので、さすがに若い女性は少なかった。これは三井慈善病院の名残で、カーテンや戸棚で仕切ったのは昭和26年(1951)頃からであった。

手術室は別館の1階にあり、術前、術後は勿論、重症患者のレントゲン撮影のためでも、担架に乗せて1階から2階、3階と搬送しなければならず、その上げ下ろしは高齢の小使いさんの仕事であった。しかし、患者さんを落としたことなどは一度もなかった。

検査室は以前解剖室であった2号館にあり、タイル張りで水捌けのため、やや床が傾斜した所に大きな検査台があり、昭和25年(1950)になってもアルコールとクレゾールが各一本あっただけで、使われた形跡は全くなかった。その後、事務にきた竹内(現姓黒澤)侑子さんが専任になった。

剖検は検査室の検査台に死体を載せていた。病室から覗かれるので窓に新聞紙を貼って目隠しをしていた。これは昭和26年(1951)に剖検室が中庭の塀際に来るまで続いていた。解剖医は東京大学病理学教室に電話をすればいつでも来てくれた。病理医の援助は多大であり、病院の過去の歴史から関係が深かったからであった。

食堂は内科の地下にあり、患者の配膳は全部食養室と病棟手伝いで行っていた。盛り付けは病棟で行っていた。職員の食事もここで行っていたが、各自持参のものは勤務場所で食べていた。昭和26年秋、当時の朝日グラフに慶應病院の新しい病棟と、昼食用に廊下で練炭コンロの秋刀魚を焼く三井厚生病院を対比した皮肉な写真が出たことで全職員は悔しい思いをした。

トイレは男女共用で不潔感もあり、ベニヤ板製の黄色の扉に簡単な引っ掛け鍵がついているというだけだった。極めて不評であったが、直すこともなかった。

昭和26年(1951)、2階建て木造モルタル造りの新館(3号館)50床が出来たときは皆、大変喜んだものであった。新玄関の2階には院長室、部長室、本館1階の旧待合室には整形外科、事務室跡に小児科が新設され、さらに本館2階に眼科が置かれた。また検査



室、レントゲン室、手術室も改装された。動物小屋、解剖室などは中庭の高塀沿いに設置された。

病院には戦前からの三井一族の寄贈によるラジウム針が地下にあり、これは盗まれず焼け跡にも残っていて、外科領域の乳癌、婦人科領域の癌に使用されていた。これを持っている病院はレベルが高かったことを示すものであった。その半分を癌研究病院に貸与していたが、この代償や、その後三井記念病院建設時にどう処分されたかは不明である。時代の変遷と共にラジウムはコバルトに代わり、使われなくなったからでもあった。

病院の施設は最低でも医師は最高医療の自負は持っていたし、特に難しい病気の患者が多かった。患者の人権問題などは起こらなかった時代であったが、患者を大切にしていたし、患者さんも職員に対して敬意を払っていたことで、総じて評判は良かった。

昭和31年(1956)、ブロック造りの2階建て暖房付きの新館58床を新築し、計212床の病院になった。これを三井各社に割り当て、費用を出してもらったが、当時では既に時遅く配管暖房が普通で、三井の利用客は少なかったが、三井系の役員は結構利用していた。

新館以外ではなお暖房は練炭コンロ、達磨ストーブを使用していた。しかし、これで一応中規模病院としての地位はできた。

職員たちは、病院が少しずつ立ち上がっていく姿を実感していた。戦後は汚い病院と言われていたが、BC棟の建替え工事が始まり、いざ取り壊すとなると色々な思い出が吹き出て名残惜しく、最後の日にお茶の時間も作った。

だが、そのBC棟も今回、最新施設に建替わった。医療レベルを絶えず一級に保つことがいかに困難であるかがわかろうというものである。

こうした戦後の苦勞を乗り越えてきた方々もほとんどが鬼籍に入られた。あらゆる面で医療現場は当時とは様変わりしているが、「病人を治療する」という精神そのものは変わることはない。最先端の病院となっても、昔の慈善病院の本来の目的を忘れず医療活動に励み、社会に貢献することを念じている。